手にすると、滿洲のきりぎりす、奉天の蟬、曠野の小學生、と云つた字句がまづもつて胸にくる。茫々の世界で、詩人の眸子が行きずりに心をとめたやうに、これらの詩篇も何か哀憐の情の見過しがたいものがある。

觀念に煩はされない、驚きやすい犀星氏の眸子と呼吸は、曠野と、忽然としてあらはれる町と町の表情を詩篇に鮮やかにつたへてゐる。とくに哈爾賓を歌つた「中央大街裏」等々の詩は、私にとつて興深くあつた。氏の青春である「愛の詩集」を記憶する讀者には、少女ネルリの像や、成長したネルリの呼吸をきくやうに丁々と迫るものがあるではないか。

ことばは分ちがたけれども
肌さしのべ見よと云ふならん
おのが肌のうつくしきをいふならん
さらばいま少し寄りたまへ
大なる膝すすめたまへ
いかなる驚きのあるならん

（中央大街裏）

「愛の詩集」の著者は「愛の詩集」の傳說世界に肖た瓦や人や寺院の傍を、うすい春の陽をあびて歩いていつたのである。

犀星氏が茫々の曠野に見たイメージが一つ、

さびしき枯木のところどころに
たまり水光りて
鳥はいまだ啼きもやらぬ
ここは哈爾賓近き荒野なり
いづく果しなき荒野なるかな
砂けむり立ち
人ひとり歩むことなく
ただ明るき日のあふれたる荒野なり
荒野の美しさ極まり
大なる象のごとく横はれり

（巨なる象）



なほ、私は「作家の手記」この一篇の自傳小說を一氣に讀み通した。且て萩原朔太郎氏の「氷島」を讀んだときも、その詩篇の一つぴとつに書き加へられてゐる散文の註釋を、かりそめの註釋とは思へず、詩篇とこもごも誦したのであつたが、「作家の手記」に於ける小說と詩もひとしく必然のものを感じた。

小說の一篇を書き終るごとにかならず一篇の詩が浮んでくるので、夕暮のうすら明りに書きとどめておいたのだとは、著者自らの言葉であるが、卷頭の「女中部屋」に始まる哀憐の歌は、かつての抒情小曲の韻律を、今日も北の國の梢にきくごとく、人となることのきびしさが、しみじみと歌はれてゐた。

（室生犀星著　詩集「哈　爾　賓」
草木屋出版部發行）

# 詩集西康省

立原道造

この道を泣きつつ我の行きしこと我がわすれなば、たれか知るらむ——と言ふ表情のあひだで、僕らは何をうけとればいいのか。そのあとに書きつらねられてゐるかずかずの詩句は僕らに何を語りかけてゐるのか。

……詩人はたいへんにイロニイを愛する。そして愛し方もまたすでにイロニイである。僕らがいまこの本といつしよにゐるときひどい拒絶をうけてゐる。この詩人が拒絶してゐるものは何かとかんがへてゐて、ふと僕は僕らに向つてそれがなされてゐると知つたとき、不意にこの詩の本が目のまへにひらける。「我がわすれなばたれか知るらむ」と言ふ言葉が何であつたか。だれがそこにゐなくてはならなかつたのか。

この孤獨のなかで詩人は微妙な神經と趣味にささへられ、色のかはりに色あひを用ゐながら、詩の可能と詩の輪廓とをだけつひに描き示して、詩を示さなかつた。詩をうたふ場を拒んでゐるものが何であるかは、聰明にもかくしてゐる。そのかくれた奥でだけ歌がひびく。

彼等が口をあけて歌ふとき
その口腔はうす紅い
——それを俺は永い間愛して來たものだ
芳ばしい微風が薄い雲をひく
その奥で歌だけがいつまでも殘る
世界はその方がもつと美くしい

（歌唱）

この最終の一行が、彼の魂にたいへんに近く、あるひは魂自らとむすびつく。悲劇となることはここではじまる、ひとつの世界に方向だけを設定して、すべてを消してしまつたときに。かうしてこのとどまらねばならない悲劇が、その感情が彼をリリシズムに引きよせる。そのリリシズムがふたたび詩の可能を彼に近づける。しかし結局ただ詩の可能と輪廓とを。この循環がいかなるときにも執拗にくりかへされてやまない。彼は詩のなかにゐてすら、詩からとほく、だれのためにともなく拒絶しつづけるのである。伊東靜雄にあつて、詩索と呼ばれた場と、この詩人にあつて輪廓と呼ばれる場とを注意してくらべたまへ。ふたつの拒絶といふ言葉は、ふたつの極となつて、僕らのまへに淵をひらく。その淵に花を架けるのはおそらく昨日の詩の



美しい展開である。發想の瞬間によみとられる、詩の表情よりも多分もつと適確に淡い心情である。このやうな詩は昨日の美しい新聲であつたし、おそらく今日もなほ、從つてまた永遠に美しい歌聲であらう。しかも詩人はそれをうたつてゐるのではない、このリリシズムが、もつとあちらのもの、循環しながら詩の方向をだけさししめす。餌食となつて抒情が存在し最大限に完成し得るのは、悲劇者の持つ運命であり、しかも詩人は詩人の運命のなかに住まなかつた。彼にとつて悲劇とは何か——

かぢりかけの幾片かのパンとソオセイヂ
食鹽の瓶と並んでは石竹の花甕
くすんだ銅版畫の中で魚釣るひとびと
すべては食卓より上にある

（悲劇）

つひに繪を描いてやまないこの詩精神は何と呼ばれるか——しかも顏料は僕ら共通の意味でつめたい溶液で描いても描いても透明に何ものをも畫布の上に描き得ない。そして筆すらつひに凍つてしまつて、平らな面を塗り得ないまま、それが尖つた筆の端で、線と點とをだけ描いてしまふ。しかしその傷ついた軌跡が色を帶びて、僕らの視線をとらへ得るか——すべてを餌食として誇らかに世界設定を成就した詩人が、停止するのはここである。

このとき、この詩人をもふくめて、僕らの「午前」とも呼ぶべき異質の時代が、このかがやかしい先人の詩を超えて、黎明を染めねばならない。

（田中克巳著　詩集「西康省」　コギト發行所發行）

## 八一　〔田中克己宛　十月四日　盛岡〕

詩集西康省とお心づくしのコギトたしかにいただきました。あの本は非常におどろきました。しばらくは反撥と不安とだけで本をひらくことが出來ずにゐました。あなたの仕事が、拒絶のふかさで先づはかられねばならなかつたことから僕の西康省論ははじまるでせう。つまりそれもあなたの用意なさつた心情だらうと想像します。しばらくして僕は一氣に最初からよんでしまひました。こんな風の詩集のよみ方はないとおもひます。よみをへてまへの感じは一層ふかまりました。伊東さんの場合よりもなほこの精神は拒絶してゐないだらうかと。比較級の問題ではなく。

僕がコギトで、ズスヘンなどよんで、そのあと甘美な小曲にそれをつくりかへてゐたこと、まちがつてはゐなかつたが、正しくはなかつたらうとおもひます。こんな心情をもうすこしくはしくかんがへて、四季あたりに書きたいとおもひます。加藤健の短い抽象についてもいひたいことがあるのです。

あの詩集のことも西康省といつしよに書いてしまふかも知れません。

堀さんは多分輕井澤町八三五だらうとおもひます。もう輕井澤には堀さん位しかゐないでせうから八三五にはゐなくとも多分とどくとおもひます。十月のはじめにはつるやあたりに移つてゐるのかも知れません。

とりあへず右御禮にまで。草々

道造

田中克己樣